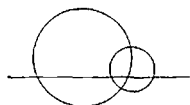


〈展示会〉



神戸の展示会に係わって

豊田信介

当記念センターでは、オープン・リサーチ・センターの発足以来、所蔵資料等の外部公開を目的とした「出張展示」を全国各地で行ってきたが、昨年11月に神戸で開催された今回の展示会においては、自ら現地での運営スタッフの一人として、微力ながら参加させて頂いた。自身としては2007年の東京展示会以来2年振りの“現場”であったが、経験豊富な他のスタッフに支えられつつ、何とか無事に3日間を乗り切ることができた。

今回の展示会は3日間のうち2日が平日であり、また会場が都心部から若干外れた所にあるなど、前回までの展示会に比べると不利な環境下での開催であったが、講演会開催日の11月3日を中心に多くの来場者に恵まれ、全体としては概ね盛況であった。展示物に対する眼差しは皆熱心であり、中には会場を一回りするのに1時間以上費やす方もいるなど、神戸の人々の意識・関心の高さを実感した。

そのような“熱心な”方々が多かったこともあったか、この3日間においては、来場者から展示内容等に関する質問を受ける機会が度々あった（特に私は受付を担当していたため）。しかし申し訳なくもドの付く素人である私にはマニュアル以上の回答はできず、結果的に多くの質問を“専門家

スタッフ”に丸投げという有様であった。無論、いいかげんな回答をするより素直にバトンタッチの方がミスもなく望ましいとも言えるだろうが、特定のスタッフに負担が集中するのを避けるということを考えれば、少し勉強すれば答えられるような質問については、“素人スタッフ”でも対応可能にしておくべきなのは当然である。今回の件で己の不勉強さを痛感しつつ、今後の課題としたい。

また、来場者からの質問の中には「何故おたくが東亜同文書院の展示をやっているのか？」という根本的なものもあった。この種の質問は東京展示会の時にも受けた経験があるのだが、これは愛知大学が中京圏以外では無名の存在であることの証である。今回の神戸を含めたこれまでの「出張展示」によって、両校の“知られざる”関係も多少は世間一般に浸透したと思いたいが、このような認知を目的とする活動には何よりも継続性が大切である。大掛かりな展示活動をオープン・リサーチ・センター事業終了後も行っていくことは予算の面でも難しいと予想されるが、今後は経常費の範囲内で実行可能なPR活動を考え、東亜同文書院と愛知大学のことを簡単に忘れ去られないようにすることが必要ではないかと思う。